

法政就業力通信

～今月のさんぽ道～

法政大学

産学連携 3D 教育プロジェクト
<http://3dep.hosei.ac.jp/>産学連携 **3D** 教育プロジェクト

就職活動が学生を成長させる理由

教授 藤村博之（ふじむら ひろゆき） プロジェクトリーダー



略歴

84年名古屋大学大学院卒

京都大学博士（経済学）。

84～89年京都大学経済研究所
助手、90～97年滋賀大学経済
学部助教授・教授。97年～03年法政大学経営学部
教授、04年～IM研究科教授。

e-mail:

fhcdc@hosei.ac.jp

研究室は新一口坂校舎4F

考えて判断して行動することの繰り返しで学生を育てる

4年生は就職活動の前と後で大きく成長する。本学が開発したHAT(はたらく力の測定手法)においても、この点は確認されている。

では、なぜ就職活動が学生を成長させるのだろうか。私は、「考えて、判断して、行動することの繰り返し」が学生の成長を促していると考えている。

学生が就職活動に取り組むとき、様々な情報を集めて、考えることから始まる。自分がやりたい仕事は何か; 自分に向いている仕事は何か; どうやって自分にふさわしい企業を見つければいいのか; その企業で働いているOBやOGがいれば会って話を聴きたいがどうすればいいのか等々、自分が持っている知識を総動員していろいろなことを考える。

考えるだけでは就職活動は進まない。意思決定をして、行動しなければならない。例えば、希望する2つの会社の説明会が同じ日の同じ時間帯に行われることがわかったとき、どちらかを選ぶ必要が生じる。あるいは、時間を少しずらしてもらうことで両方の説明会に出席できないかと考え、可能性をたずねてみる。判断して、決めて、行動しないと何も進まない。悩んで考えることで人は成長する。就職活動は、その機会になっている。

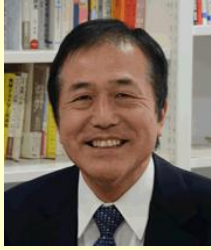
大学は考えて判断し行動する場を提供してきた

大学は、昔から、考えて判断し行動する場を提供してきた。教員から提起された課題について調べて自分なりの考えをまとめ、それをみんなの前で発表して意見をもらう; 同じ本を読んで友人と議論する; ある事件に興味を持ち、その事件の背景を調べてゼミで発表して議論する…考えて判断し行動することを繰り返し行ってきた。それが学生の成長につながった。

いまでも大学は、考えて判断し行動する場を提供し続けているはずだが、以前に比べると、その機能が弱くなっているように見える。それは、学生たちが率先して本を読んだり、友人同士で議論したりしなくなったためだと考えられる。

学生に「大学生なんだから本をたくさん読めよ」と言ったところ、次のような返事が返ってきた。「先生、本を読んだって、その内容は大半忘れてしまいます。本に書いてあることは、ネットで調べればすぐに出てくるのだから、本を読むって時間の無駄じゃないですか。」一瞬唖然としたが、次のように答えた。「確かに、読んだ内容は忘れてしまうかもしれない。しかし、本を読むことのいい点は、考えることなんだ。読んでいる間は、文字を追いつつ、著者が何を言おうとしているのか、どういう場面設定なのかを考えるよね。それが思考の訓練になる。大学生なんだから、1年間に自分の背丈と同じ高さの本を読むくらいの気持ちでいて欲しいね。」

私たち教員は、学生に対して、考えて判断し行動することをもっと求めていかなければならない。そうすれば、大学1年生から2年生、3年生と学年を追うごとに成長する姿を確認できるはずである。就職活動のときだけ成長するというのでは、あまりにも寂しい。教員から見て学生のためになることを強制的にやらせるのも大事な教育である。



略歴 70年慶応義塾大学経済学部卒。
70~06年伊藤忠商事(株)勤務、06~11年
帝京大学と法政大学職員。
11年~法政大学教員

「叱る」ことの大切さ

特任教員 有田 五郎（ありた ごろう）

今年の1年生授業受講態度が更に2極化していると感じた。すごく真面目な学生とその逆である。受講にあたって「他者に迷惑を掛けぬこと」は最初から徹底しているので、後者でも騒いだり、おしゃべりをしている訳ではない。授業を聞かずにスマホに没頭というケースが多い。問題は授業を聞いていないということである。これがリアクションペーパーへの記載内容から読み取れてしまう。そこで次の授業冒頭で叱った。

ここで大事なのは大人数の中でも「自分のことだ！」と気付かせることだ。授業を聞いて書くところを、聞いていない学生は「リアクションペーパーの設問だけに答えてこう書く」、それは自ら「私は聞いていませんでした」と書き記しているのだと教える。そして、その翌週に優れた記載内容の事例を発表する。このように本人に気付かせるとともに方向を示すことを積み重ねている。その後、幸いにも気付いた学生の激変ぶりがこちらを驚かせてくれた。



略歴：日米ハイテク企業での営業・人事を経て人事コンサルタントとして独立。キャリアカウンセラー資格取得後は多くの大学でキャリア論の講師を務める。

キャリア教育担当者は専門教育の水先案内人

特任教員 鈴木 美伸（すずき よしのぶ）

キャリアというものは、なかなか思った通りにはなりません、やった通りになるものです。私は授業で、前者を「フィードフォワード(予習)型キャリア」、後者を「フィードバック(復習)型キャリア」と教えています。これらは本来、制御工学の専門用語ですが、一緒にこの言葉の意味(制御の概念)を説明すると、学生は意外と喜んで学びます。

大学には多種多様な学問があるわけですから、そうした知識や概念を上手に組み合わせることで授業を組み立てることは、学生の知的好奇心をかき立て、なんとなく大学や学部や授業を選んだ学生自身の選択を意義のあるものとすることができるでしょう。

つまりキャリア教育担当者は、専門教育の水先案内人であると同時に、専門科目の研究者である先生方の代理人でもあるといえるわけです。こうした認識をもちながら、さりげない授業の工夫をしていきたいと思えます。

「空気」で人を動かす

教育支援課長 平山 喜雄（ひらやま よしお）



法政大学法学部法律学科卒。
学務部教育支援課長

「空気」で人を動かすといってもドラえもんや空気砲の話ではありません(笑)。「KY」という言葉がある(あった?)ように日本人はまわりの「空気」にとても影響されやすいと言われており、チーム力をアップさせたいなら「場の空気」をよくしようという横山信弘さんのご説です。空気つながりであれば、周囲の状況により意味が変わる現象を心理学的には「文脈効果」と言い、これはマーケティングにも応用されているそうです。「〇〇へ行くと××したくなる」や「〇〇と言えば××だよ」というような「空気」を作ってしまうことです。多くの人がそうしているのを見ると人は「感化」されていきます。そしてまわりの影響を受けやすい人ほど、購買欲が高まって購入してしまうという仕組みです。先日のイオンのインターンシップに参加した学生グループもまさに「映画館ではポップコーン」をキーワードにしたプレゼンをしていました。「なんで?」と聞いても「映画館に行ったらポップコーンでしょ」「常識でしょ」と言われてしまいました。少なくとも「常識」じゃないと思いますが、完全に「空気」に感化されてしまっています。そういう私も「とりあえずビールでしょ」派です。常識でしょ(笑)ということで学生の間にも「大学に来たら勉強する」とか「大学生なら自分から行動しなくちゃね」という「空気」ができれば我々の仕事も少しは楽になったりするのでしょうか、それとも「KY」と言われてしまうのでしょうか。

◆ 8/1 ワークショップ「ビデオ教材を用いた『はたらく力』の育成を考える」を開催します

このたび、「働く場面を実感させるオリジナルビデオ教材」の新しいシリーズV「中小企業編」・VI「百貨店編」・実際の授業での指導ポイントなどをまとめた「ビデオ教材の活用法」を制作いたしました。これらのビデオ教材をどのように『はたらく力』の育成に活かすかについて、参加者のみなさまとともに考えたいと思います。また、ワークショップ終了後、情報交換会を行います。みなさまのご参加をお待ちしております。くわしくはHPをご覧ください。http://3dep.hosei.ac.jp/

◆ 編集後記：法政大学を皮切りに企画販売型共働実習(インターンシップ)販売研修が始まりました。学生は店舗運営を頑張っています。が・・・我々はひたすら be patient で、patient になりそうです(泣) << 事務局：平山 >>

法政大学 産学連携 3D 教育プロジェクト (事務局：学務部教育支援課)

〒102-8160 東京都千代田区富士見 2-17-1

TEL:03-3264-9520 WEB:http://3dep.hosei.ac.jp/